

〔事例研究〕

要介護状態にある親を介護するために離職した息子が 両親の介護に向き合う体験

梶野 好美¹⁾ 竹田 裕子²⁾ 加藤 真紀²⁾ 原 祥子²⁾

要 旨

目的：要介護状態にある両親を介護するために離職した息子が、両親の介護に向き合い、どのような体験をしているのかを明らかにすることである。

方法：離職した息子が両親の介護をしている、あるいはしていた2事例の事例研究である。

結果：対象者は、介護のために離職し帰郷した息子（A氏）と同居して仕事と介護を両立してきたが離職した息子（B氏）であった。A氏は《今までとは違う親の姿を目の当たりにする》体験を重ね、《おふくろらしくない姿に泣きたくなる》や、《親父がなかなか自分の介護を受け入れてくれないことに逃げ出したくなる》体験をし、《人と話せない環境に気分がふさぐ》感覚を抱いていた。《趣味を介して新たな人とのつながりを得る》ことや、一緒に暮らすうちに《ありのままの両親を理解しようと思う》ようになり、《自分なりに感情をコントロールする方法をとる》体験をしていた。B氏は、《日中の親を看たことで離職前には気づかなかったことが見える》体験をしていた。両親と濃密に関わることで《親に自分の言動を分かってもらえないことに気持ちの行き場がなくなる》が、《母親の介護をしていて嬉しいと感じる》や、《身近な人やモノに気持ちが救われる》体験をしていた。そして、《親のことを一番に考えたい》と思い、父親を介護するうちに《父親が愛おしい存在になる》体験をしていた。

考察：看護職は、息子介護者の苦悩を理解し、上手く介護できていることを言葉で伝え息子介護者を支えていくことが必要である。

キーワード：要介護高齢者、息子介護者、体験、事例研究

1. 緒 言

近年、高齢化に伴い要介護高齢者数は年々増加し、要介護高齢者の介護を担う家族は、配偶者に次いで子が多くなっている（厚生労働省，2016a）。一世帯あたりの平均世帯人員は2.74人（厚生労働省，2017）であり、要介護状態にある高齢者がいる世帯では、自宅で要介護高齢者とともに生活する配偶者や子が一人で介護している状況があると推察される。介護する子の年齢は40～50歳代が多く（厚生労働省，2016b）、その介護者の中には、自分の仕事

をもちながら介護している者もいる。仕事をしながら主介護者として在宅介護を担う女性介護者の体験においては、在宅介護が担える職場で時間を上手く使いこなす、仕事がある生活を理解した介護協力を得るなど、仕事と介護を両立させる工夫をしていることが明らかとなっている（内田，松岡，2016）。このように女性介護者の中には、他者に協力を求め、家族やサービス事業者、同僚の支援を柔軟に受け入れて両立させている人もいると考える。

一方、男性介護者においては、要介護者への接し方や目が離せないことに困っている、買い物や外出に困っている、友達や近所との交流の減少に困っていることが介護負担を大きくしていることが報告され

1) 松江赤十字病院

2) 島根大学医学部地域・老年看護学講座

ている(栗林, 山田, 森岡, 2016)。このことから、男性介護者は被介護者への関わりにくさや自分自身の日常生活や社会生活の困難を感じ、それによって介護負担が増していることが窺える。また、男性介護者については、虐待などのネガティブな話題を目にすることが少なくなく、息子介護者による虐待が最も多いとの報告がある(厚生労働省, 2015)。しかしながら息子介護者は介護を大変だと自覚していても、自分の内面を他者に伝えることに難しさを感じており(平山, 2017)、他者に助けを求めずに一人で抱え込んでしまっていることが考えられる。

介護・看護を理由に離職した者の数を2012年と2017年で比較すると、総数は約10万人と変わらないが、女性介護者は約9千人減少しているのに対し、男性介護者数は約7千人増加している(総務省, 2017a)。さらに、介護・看護を理由に離職した男性介護者においては、40~50歳代にある者が多い(総務省, 2017b)ことから、離職して要介護状態にある親を介護する息子が一定程度存在していると考えられる。介護のために離職した理由には、「自身の希望として介護に専念したかった」があり(厚生労働省, 2012)、親を見てあげたいという思いから離職している息子介護者がいると考えられる。息子介護者の体験についての先行研究では、認知症を発症した母親を介護する息子介護者の対応(横瀬, 2010)について明らかにされたものはある。しかしながら、離職して両親の介護に向き合っている息子介護者に焦点をあてたものは見当たらない。親を介護するために離職した息子が両親の介護に向き合う体験を明らかにすることは、在宅看護における息子介護者への援助のあり方を検討するうえで重要であると考えた。

II. 研究目的

本研究は、要介護状態にある両親を介護するために離職した息子が、両親の介護に向き合い、どのような体験をしているのかを明らかにすることを目的とした。

III. 用語の定義

本研究における「両親の介護に向き合う体験」とは、要介護状態にある両親を介護するために離職した息子が、両親を介護する中で生じた感情や思い、行動とした。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

要介護状態にある両親を介護することを理由に離職した息子が、両親の介護に向き合いながらどのような体験をしているのかを、具体的かつ詳細に明らかにするために事例研究法を用いた。

2. 対象事例

X県A市、B市、C市において事業所として登録されている訪問看護ステーション(35ヶ所)と居宅介護支援事業所(63ヶ所)に対し研究の目的、方法を説明し、本研究への協力を得られた事業所は3ヶ所であった。同意の得られた事業所の管理者に、対象者になり得る3名の息子介護者へ研究協力をお願いの文書と研究協力の意向についての返信用紙を渡してもらった。3名のうち協力の意向を示された2名に対し、研究者が研究の目的、方法を説明し、同意を得た。同意を得られた要介護状態にある両親を介護するために離職した息子が両親の介護にあたっている、あるいはあっていた2事例を対象事例とした。

介護期間が1年未満の場合と5年以上10年未満の場合においては、介護者の負担感が大きい(黒澤, 2011)。そのため、両親の介護をしながらも、その体験を語ってもらうことが可能であると考えられる。両親を介護する期間が1年以上5年未満にある息子介護者とした。

3. データ収集方法

対象者に半構造化面接を行い、離職して両親を介護する中で生じた感情や思い、行動を中心に尋ねた。面接は2回実施し、面接の合計時間はともに154

分であった。2回目の面接は、1回目の面接で明らかになった情報を研究者が整理したものを提示しながら、より詳細に当時を振り返ってもらった。面接場所は対象者の希望に沿い、2事例ともそれぞれの自宅で行った。面接内容は、承諾を得た上でICレコーダーに録音し、面接中に研究者が考えたり、感じたりしたことなどをフィールドノートに記録した。

面接では、離職してどのような介護をしていたのか、介護をしながらどのような生活をしていたのかをありのまま語ってもらった。また、対象者の背景を理解するために年齢、婚姻の有無、離職時の年齢、離職時の職業について本人から得た。加えて両親については、年齢、利用している介護サービス、介護期間について情報を得た。データ収集期間は2018年9月から10月までであった。

4. 分析方法

面接内容を録音したデータから逐語録を作成し、繰り返し読むことで全体を把握した。その後、対象者が離職して両親の介護をする中で生じた感情や思い、行動を語った内容を事例ごとに抽出しコードをつけた。コード化した内容を体験の意味内容の類似性を考慮しながら分類し、分類したまとまりにテーマをつけた。そして、事例ごとに両親の介護に向き合う体験を、テーマと対象者の語りを用いて整理し記述した。

データおよび分析結果の真実性を保つため、面接時に語られた内容や分析した結果に相違がないかを対象者に可能な限り確認し、訂正や補足を受けた。また、一連の分析過程において、老年看護の臨床経験を持つ複数の専門家と共に継続的に検討を行った。加えて、老年看護学および質的研究の指導者からスーパーバイズを受けた。

5. 倫理的配慮

本研究は、鳥根大学医学部看護研究倫理委員会の承認（承認番号312）を得て実施した。対象者には研究目的、方法について文書を用いて口頭で説明を行った。研究への協力は強制ではなく自由意思に基づくものであり、研究協力の拒否が要介護状態にあ

る親の今後の看護やサービス利用等へ一切影響を与えず、同意した場合でも途中での協力辞退が可能であり、その場合も不利益を被らないことを保証した。研究データは、本研究以外には使用しないこと、学会等で研究結果を公表することについて対象者に文書を用いて口頭で十分に説明し、同意書への署名により研究協力の同意を得た。本研究は2事例の極めて個人的な経験をテーマとしていることから、特定の個人が識別されないように匿名性については特に留意した。公表の際には、個人が特定されないような形で表記することに加え、必要な情報を厳選して提示した。

V. 結果

1. 別居していた息子（A氏）が介護のために帰郷した事例

1) A氏と要介護状態にある両親の背景

A氏は60歳代半ばの既婚者であり、60歳代前半までサラリーマンとして働いていた。両親は90歳代の父親と80歳代の母親であった。母親は通所介護を週4回利用していた。何年ぶりに故郷に帰り、介護期間は3年2か月であった。

2) 介護のために帰郷したA氏が両親の介護に向き合う体験

離職し帰郷したA氏が両親の介護に向き合う体験として、7つのテーマが抽出された。以下、テーマは【 】, 対象者の語りは「 」内に示し、前後の文脈で理解しにくい箇所は（ ）内に言葉を補って示した。

離職し帰郷したA氏が両親の介護と向き合う体験には、【今までとは違う親の姿を目の当たりにする】があった。これは、帰郷し両親との同居生活が始まり、今まで自分が思っていた親の姿と今の親の姿が違うことが分かる体験であった。A氏は「（親父は）夜眠れないから、お酒飲むとかね、なんだかんだ。考えこむ、年寄りだからか、親父の性格なのか。もともと明るくてひょうきんな親父で、（自分

が責めたことで) あんなに落ち込むのは、あんまり見たことがなかったですよ」と、これまで自分が思っていた父親の姿からは想像できない反応をみて驚いていた。一方母親については、「物をそこらへんに捨てるのは、結構毎回言っているのに、今は少なくなりました。ただ、ちょっと目を離すと、空き缶から瓶から、あとは、野菜でしょ。野菜はまあ昔からの習慣だろうね。畑に捨てるっていうのはね、でも、食べられるものは捨てないでしょう。自分が嫌だからって、捨てるんだよね。それがね、とても辛くて、そのたびに最初わかんないから、怒るわけよ。ダメだろうって」と語るように、自分はいらぬからと食べられる物まで捨てる母親の様子を見て、今の母親のことが分からないという体験をしていた。

さらに、A氏は「最初はおふくろに食事の支度なんかは手伝ってもらっていたんですけど。もう、全然できないよね。これはすごいショックだった。最初はまあ、おふくろがやれるかなって思ってたんですけど、何もできないね」と語るように、母親がこれまでしてきた食事の支度すら出来なくなったことに、衝撃を受けていた。また、「おふくろが言うこと聞かないときは、手は出ないけど、なんで、なんでわかってくんないのって。最初の1年は悩んだかな」と、認知機能低下のある今の母親を受け止められないことに悩み、【おふくろらしくない姿に泣きたくなる】体験をしていた。

父親とのやり取りについては、「トイレ作った(改装した)ばかりなんだけど、あれ(トイレ)が壊れてるって言うんだよね。何でよって言ったら、「いや、水が漏る」って。水が漏るわけないじゃん。下(床)ビジョビジョだよ。親父がもう(尿を)まき散らすでしょ。だから、「座ってやってよ」ってお願いしても、「そんなことできるか」って。で、来る度にここ(ズボン)をザーって濡らしてくるでしょ。で、そのままコタツに潜り込むでしょ。勘弁してよ」と語るように、説明したりお願いしたりしても聞き入れてもらえない経験をしてい

た。さらに、「親父はご飯の支度を(男の)俺がしているのが気に入らないんだよね。掃除しているのも気に入らない。「なんでお前がそんなことしてるんだ」って。たまに帰って来て話をする(帰郷する前の)親父と違うんだよね。それが一番ショックって言ったらショックかな。それが1年目だよ。ね。(同居して介護することを)やめて帰ってやろうかなって何回も思った」と語り、介護を一生懸命しても受け入れてくれないため、東京の家族のところへ帰りたいと何回も思うほどの【親父がなかなか自分の介護を受け入れてくれないことに逃げ出したくなる】体験をしていた。

A氏は「親父、おふくろ(も)しゃべんないでしょ。買い物に行くじゃない、そうするとレジのお姉ちゃんでしょ。(1日の中で顔を合わすのは)3人しかいないから。近所も見ての通り、人出てないでしょ。全然話さなかったよね。同級生と話すのかって、俺、何年も(地元を)出てたから、同級生知らないんだよね」と語っているように、顔を合わせる人が1日に3人しかおらず、離職したことで人との会話の機会が減っていた。そして、「悩み、もう、鬱になってくる。どんどんどん、どうすんだ、どうすんだって、もう人と話すのも嫌だって」と語り、【人と話せない環境に気分がふさぐ】体験をしていた。

帰郷したA氏は、離れて暮らす妻とは電話で話していた。「(東京の)家に家内がいると電話でしょっちゅう話し合いしたりして、家内曰く“最低一日5人の人と話をしなさい”って言うからね。5人つったってね。(中略)一生懸命探して話しましたよ。いくら、5人たってこんな所にいたら無理でしょ。だから、趣味しようかなって」と、妻との会話をきっかけに家に閉じこもらないようにしていた。そして、「社会とのつながりがね、なかなか切れる時があるから。だから、趣味(ラジコンクラブ)でじゃあこうでしょ(人と話す)。本当は早く東京に帰ってね。実は向こうの方が友達が多いんだよ。関東圏内に友達がたくさんいる」のように、離

職し親の介護のために帰郷することによってこれまでのつながりが途切れるが、【趣味を介して新たな人とのつながりを得る】体験をしていた。

帰郷した当初は、なかなか両親の行動が受けとめられないA氏であったが、両親との暮らしを重ねるにしたがい、【ありのままの両親を理解しようと思う】ようになっていた。A氏は、「親父はそれをする（おふくろの顔色を見ながら言う）ことが出来なかったのでガンガン説教して、だからそれ（両親のやり取り）を見ていたのかもしれないよね、あの時。あー言い方があるのかなって。ネットで見たら、やっぱり反発したり否定をしちゃうと向こうはもっとこんがらがって、「あたしなんていらないのか」って（母親が）言うのはそういうことかって」と語るように、両親のやり取りを見ることで自分の母親に対する関わりを振り返り、インターネットで認知症について調べて母親を理解しようとしていた。父親については、「来た（帰郷した）時は長生きしてほしいと思ったけど、もうあんな（入院して一日中寝ている）状態見ていたらね。親父も言っていたけど、もういいよ。これ以上、天井見ても、白いものしか見えないところにずっといるようじゃつまらん。もうそろそろ逝きたいって。なんか、その気持ちわかるよね。なんか、見てられないよね」と語り、入院し動けなくなった父親の辛い気持ちを理解しようとしていた。

生活を共にする時間を重ねることで、両親のことが少しずつ分かるようになり、「一緒に生活していくうえで、（母親には）逆らわないようにしている。でも、ダメな時は1回は言います。そうすると向こうがカッとなる（怒り出す）から、カッとなる（興奮する）と最悪からだで押さえつけるしかないよね。（中略）だから逆らわない。「そうだね」っていうのをまずは言う」のように、母親とのやり取りの経験などから押さえつけるまで興奮させないよう、自分なりに母親とのぶつからないような関わり方を見つけていた。さらに、「嫌だと思ふことはあるけど、でもしょうがないね。だから、割り切る、仕事

かなって」のように、両親の介護を仕事と割り切ることで両親に対して感情的にならずに介護ができるなど、【自分なりに感情をコントロールする方法をとる】体験をしていた。

2. 両親と同居して仕事と介護を両立してきた息子（B氏）が離職した事例

1) B氏と要介護状態にある両親の背景

B氏は60歳代前半の未婚者であり、50歳代後半まで工場作業員として働いていた。要介護状態にある両親は、ともに90歳代であった。両親ともに訪問介護を週2回、訪問看護を週1回利用していた。父親の介護期間は3年11か月、母親の介護期間は2年1か月であった。面接時には、両親ともに他界していた。

2) 両親と同居して仕事と介護を両立してきたB氏が離職し両親の介護に向き合う体験

離職したB氏が両親の介護に向き合う体験として、6つのテーマが抽出された。以下、テーマは【 】、対象者の語りは「 」内に示し、前後の文脈で理解しにくい箇所は（ ）内に言葉を補って示した。

離職したB氏が両親の介護と向き合う体験には、【日中の親を看たことで離職前には気づかなかったことが見える】があった。離職して日中も親を看ることで、「（母親は）がんばっていた。見えても大丈夫かなって思うくらいだった。（仕事を）辞めて1日みていると、これは（自分が仕事をしていたときは）気をつかっていたのが分かって。辞めてよかったって思ってね。倒れる（転ぶ）。そういうの（転ぶこと）があったみたいで。働いているときは、それに気づかなかった」と語っているように、離職前には気づかなかったが、母親が転倒しやすくなっていることや迷惑をかけたくないという思いをしていることを知った。

仕事を辞めて介護に専念することで、「おふくろさんに話をしても分かってもらえないとか、こうこうだからこうしないといけないって言っても分かってもらえないとか、色んな事が積もり積もって腹も立つこともあった」のように、自分の言っているこ

とに従ってもらえない母親に苛立つ体験をしていた。一方父親については、「親父さんは、私が、母親の面倒みるってことが嫌なのね。私を息子として見てないの。男として見ていた。それから（父親に対して）腹も立つようになったし、この人（父親）が死んでも涙を流すことはないだろうと思っていた」というように、父親に対して憤りを感じていた。さらに、「父親に腹が立って、本当に、ひどい時はね、もう殴ってやりたいくらいね。だけど、こうなった（拳を握る）んだけど、できないし」とやり場のない怒りを感じ、【親に自分の言動を分かってもらえないことに気持ちの行き場がなくなる】体験をしていた。

B氏は、両親の介護をしながら苛立ちを感じることもあったが、「嬉しかったことは）料理を作ってくれてくれた時が、（母親は）味覚障害で何作ってもダメなんです。その中でも食べれたのがね、気に入って食べてくれたんだってね」と語っており、味覚障害のため何を食べてもおいしさを感じられない母親が自分の作った料理をおいしそうに食べてくれたことに、【母親の介護をされていて嬉しいと感じる】体験をしていた。

離職をしてからのB氏は、ほとんど家を空けることなく両親の介護をしていた。「テレビでみたんですけど、（中略）口に出せないことを日記にどんどん書いて、毎日書いていって、そしたら気が楽になっていったって。それをやったんです。確かに多少楽になるんですよ。人に言えないことも書いていくんで」と語っているように、自分の苛立ちなどはけ口を見つけて実践していた。さらに、「そういう人（訪問看護師やホームヘルパー）の話を聞いて、自分の気持ちが救われたことがあったと思いますね。ありがたかったなっていう気持ちは覚えています。辛い時だったと思います。アドバイスがあった」と、訪問してくれる専門職に辛いときにアドバイスをもらって気持ちが救われるなどの【身近な人やモノに気持ちが救われる】体験をしていた。

B氏は、「（ありがたいの言葉や見返りは）なんに

もなしでも、私は良かったと思うよ。ていうのは、やっぱり子どものころに親から受けた愛情があったから。（中略）食べることが精いっぱい仕事で手いっぱい。その中で、小さいことでも私にしてくれたからね。出来る範囲で私にしてくれたから」と語るように、愛情をもって育ててくれた両親への感謝の思いをもって介護をしていた。「（男性介護者の会や認知症の会について）案内がありました。でも行ったことはないです。介護で家を空けられないですし。行こうと思ってもいけないですよ。どういふものかは興味があって、何か利益があるなら行きたいと思ったかもしれない」と、デイサービスなどを利用してまで自分が出かけていく価値があるのか疑問に思っていた。そして、「独断で決めることはないですね。親に聞きますね。それで、（親の）嫌がることはしません。デイサービスに試しに行ってみようかとは言ってみますよ。それで、1回でいいから行ってみようって言ってOKが出れば行かせるけど、だめならやめる」というように、両親の意思を尊重し介護をしていた。しかし、「母親を病院で亡くしてしまった。（家に）帰りたいて言っていたんですよね。（中略）でも、症状が治まった時に、またそれで（家に）連れて帰ってまたすぐ病院へ戻るようなことになっていけないと思って、そのまま入院を続けてしまった。それが、私の失敗でしたね。あの時に連れて帰るべきだったと思います」と語り、母親の希望に添えなかったと思う出来事も加わり、【親のことを一番に考えたい】体験となっていた。

母親の看取りを経験し、父親に対しては希望に沿って最期まで自宅で看ることを決めて介護をしていた。「そりゃ大変なこともありましたよ。一人で横になりたいなと思って、自分のベッドで横になって、ふっと気がついてどうしているかなって、爺さんの所に行ったら、爺さんが布団かぶっていて、布団をとったら泣き顔していて。“わし一人かいなって思っ”って（爺さんが言った）。（自分に）捨てられたんじゃないかっていう気持ちになったんで

しょうね」と語り、休んでいても父親の様子が気になるようになっていた。さらに、「母親が亡くなって、爺さんを見ておるとだんだんと爺さんが私を頼るんですよ。あの見ていて、だんだんだんだん私も変化があって。（中略）だんだんとやっぱり愛しい人になっていった」と語り、母親の看取りを経て父親だけの介護を続けることで、父親の自分に対する思いを感じとり、だんだん【父親が愛おしい存在になる】体験となっていた。

VI. 考 察

1. 介護するために離職した息子が両親の介護に向き合う体験の様相

1) 離職前には見えなかった親の姿に直面する体験
 長年地元を離れて生活し、年に数回しか両親に会わなかったA氏は、親の介護を機に離職して共に生活することで、【今までとは違う親の姿を目の当たりにする】体験をしていた。この体験は、離れて暮らしてきた間に老いを重ねてきた親の姿を一気に突きつけられるような、A氏にとっては衝撃的な体験だったといえる。そのため、なかなか生活上の支障をきたしている今の親の姿を受け止められないことで、【おふくろらしくない姿に泣きたくなる】という体験になったと考える。天谷、大塚、島田他(2002)は、認知症高齢者を介護する娘介護者の危機には、健康な親のイメージの喪失に伴う葛藤があったことを報告している。長年親と離れて暮らしていた息子介護者は、離職前の親のイメージがあるため、より一層今の親を受け止められないと考えられる。

一方、同居していたB氏も、離職し介護に専念して【日中の親を看たことで離職前には気づかなかったことが見える】体験をしていた。深山、中村(2015)は、同居家族の就労により日中独居ですごす要介護高齢者の不安の対処として、家族の帰宅を待ち、その場をやりすごす、1人の時間に気持ちを整えることを明らかにしている。要介護高齢者が不

安の解消を先送りにする行動をとることで、日中仕事をしている息子介護者は親の不安や何らかの支援が必要な状況にあっても気づきにくい。B氏のように、同居をしていても日中の親の生活状況の詳細までは分からず、また母親も息子に迷惑をかけないように出来ないことは隠していたため、離職して改めて気づくことになったのではないかと考える。そのため、在宅ケアにおいては介護者が仕事と介護を両立している時から、要介護高齢者だけの時間帯にどのような状況がおこっているのかを把握し、どのようなケアが必要か介護支援専門員を中心にケアマネジメントしていくことが大切である。

2) 介護する息子と介護される両親との思いがくい違う体験

A氏は、【親父がなかなか自分の介護を受け入れてくれないことに逃げ出したくなる】体験をし、B氏は【親に自分の言動を分かってもらえないことに気持ちの行き場がなくなる】体験をしていた。竹内(2008)は、高齢者への家族によるケアにおいては、“あるべきケア”をめぐってケアする側とされる側との、いわば価値観のずれが生じてくると述べている。息子介護者自身が考える自分の役割と親に求められている役割との間に乖離が起きているため、息子介護者は親との関係が上手くいかないと感じ、自ら望んで離職し親の介護を始めたが、一時は介護や親から距離をとりたい思いになっていたと考えられる。また、意見のくいちがい、介護者とケアされる側の両者のストレスや負担感のもとになる(竹内, 2008)ため、息子と両親それぞれがお互いの思いを確認し合えることが大切なのではないかと考える。

また、中里、涌井、平山他(2018)は、終末期ケアに関する親子間コミュニケーションの関連要因において、母親の場合には会話しやすく、父親の場合、息子とは最も会話しにくいことを明らかにしている。息子介護者は、特に父親とのコミュニケーションの取りにくさがあり、自分の行っている介護を受け入れてもらえていないと感じ、自分の言動を理解してもらえないと認識していることが考えられ

る。そのため、お互いの思いを伝えることが難しい息子介護者と父親の場合には、特に身近な家族や専門職のような第三者の関わりが必要である。

3) 社会との接点が途切れ、社会とのつながりを取り戻す体験

介護に専念したことでA氏は【人と話せない環境に気分がふさぐ】体験をしていた。中期就労介護者の介護と仕事の両立の強みとして、仕事をすることで気分転換を図り社会と接点をもつ、仕事と介護の両立にやりがいや自信を見出すなどが明らかにされている(越智, 田高, 臺他, 2011)ため、離職し介護に向き合う息子介護者は、社会との接点がもちにくくなるのが推察される。松井(2014)は、男性にとって就業は自らの社会的地位とアイデンティティの中核として位置づけられると述べている。そのため、息子介護者が離職することは、社会とのつながりが途切れるだけでなく、アイデンティティが揺るがされるような体験であると考えられる。また、松本, 桐野(2015)は、男性介護者は介護支援について、相談しても決めるのは自分、自分で頑張るために気分転換のやりくりなどの自分が頼りという思いを明らかにしており、本研究における離職し介護に向き合っている息子介護者においても、責任感をもって一人でこなそうとしていることが推察される。このような、息子介護者の行動は、社会との接点を途切らせてしまい、息子介護者の介護負担感につながるのではないかと考える。

一方で、A氏は【趣味を介して新たな人とのつながりを得る】ことで社会とのつながりを取り戻してもいた。また、B氏は介護に専念することでつながった【身近な人やモノに気持ちが救われる】という体験をしていた。男性介護者の介護負担に関連する要因の一つとして、友達や近所との交流の減少があり、一人で抱え込まないことで負担感を軽減できる(栗林他, 2016)と言われている。離職し介護に向き合っている息子介護者においても、社会とのつながりを得ることで負担感を軽減させていた。しかし、一度社会とのつながりが切れてしまうと気分が

ふさぐなどの苦しい思いを抱える体験をする場合もあり、再び社会とつながりを得ることは容易とはいえ、つながりが途切れないような支援が必要であると考えられる。

4) 介護するために離職した息子が両親に寄り添っていく体験

A氏は両親との生活を重ねることで、【ありのままの両親を理解しようと思う】ようになり、仕事と割り切ることで、【自分なりに感情をコントロールする方法をとる】体験をしていた。一方、B氏は【母親の介護をしていて嬉しいと感じる】ことや、【親のことを一番に考えたい】と思い、母親の看取りを経て、父親の介護を続けることで【父親が愛おしい存在になる】体験をしていた。池添, 野嶋(2009)は、在宅介護を要する脳血管障害や認知症のある高齢者を介護する家族は、その人らしさを大事にしたかわりをし、自分らしさの保持をして自分の中のマネジメントを行い、介護を含む生活での調和を希求していることを述べている。本研究における息子介護者は、介護をする中で、両親との思いがくい違う体験や、社会とのつながりを取り戻す体験を通して、今の両親を大事に思い、自分なりの介護方法をみつけることで両親との調和のとれた新たな関係性が構築されていたと考えられる。

また、介護中での嬉しいと感じるなどの成功体験の積み重ね、親の入院、そして看取りを経験することでだんだんと両親に寄り添っていた。山本, 石垣, 国吉他(2002)は、高齢者を介護する者が夫および息子の場合は、介護者の肯定的認識が高いほど心理的QOLが高くなることを報告している。つまり、息子介護者にとって介護中での嬉しいと感じる経験などの成功体験が介護と向き合っていくうえで重要であると考えられる。

2. 離職して要介護状態の両親を介護する息子への看護援助のあり方

別居していた息子は、離れて暮らしていた間に見えなかった今の親の姿を一気に突きつけられることで、以前とは違う今の親の姿を受け止めにくいこと

が明らかになった。したがって、看護職は離職することで見えなかった親の姿に直面する息子介護者の心情を理解して関わる必要がある。訪問看護師など在宅の場で働く看護職は、息子介護者に、以前の親のことや今の親への思いを意図的に聴き、息子介護者の今の親の姿の受け止めを理解することが必要であると考え。また、同じ思いを共有できる人や場所（男性介護者の会や認知症家族の会など）につなぐことが可能であると考え。また、同居していた息子は、日中の親の様子を見たことで、離職前から要介護状態にある親が支援を必要としていた状況に気づく体験をしていた。日中仕事をしている息子介護者は、親の不安や何らかの支援が必要な状況にあっても気づきにくいことが考えられる。同居していた息子が離職し両親を見ることで改めて気づくことがあることを看護職は理解し、気づいたことで困っていることがないかを確認し、適切な助言や支援をしていく必要があると考え。

また、息子介護者は離職し介護に専念することで、両親と思いがくい違う体験をしていた。息子介護者は、特に父親とのコミュニケーションの取りにくさがあることが考えられるため、訪問看護師や地域包括支援センターの看護職などの在宅支援を行っている者は、要介護高齢者の父親と息子の場合は、それぞれの思いを確認し双方の理解を助け、会話が進まない時には間を取りもつことが大切であると考え。また、井口（2008）は、要介護者に認知症がある場合、認知症のその人らしさを支えるためには、介護者との関係の中でみられるのとは異なる姿があり得るため、複数の解釈者、介護者以外の他者が必要であると述べている。そのため、看護職は、親の生活史や元気な頃の様子を息子介護者を含め高齢の親に聴き、今の親の理解を助けることが重要であると考え。

離職して介護に専念する息子介護者は、離職することで社会や人との接点が一度は途切れていた。しかし、本研究においては息子介護者自身が新たな社会のつながりを得て、あるいは身近な人やモノで社

会と再びつながり、息子自身が救われていた。これは、本研究の息子自身の強みであったと推察される。そのため、息子介護者に関わる看護職は、息子が友人や近所とつながりがあるのかどうかを確認する必要があると考える。つながりがある場合は、つながりが途切れていないか経過を把握していくことが大切である。また、つながりがない場合や介護で出かけられない息子に対しては、訪問看護師や介護支援専門員の関わっている他の息子介護者を引き合わせることも可能であると考え。経験のある訪問看護師や介護支援専門員だからこそ、相性を考慮し息子介護者同士を引き合わせる事が出来るのではないだろうか。また、男性の特徴から人と話すことが苦手な場合もあるため、メールでのやり取りも有効であると考えられ、少しでも社会とのつながりを得られるよう支援することが必要である。

介護をするために離職した息子は、介護する中で嬉しいと感じる経験の積み重ねから、だんだんと両親に寄り添っていた。これは、息子が介護に向き合う体験から培った力であると考え。高見（2008）は、家族介護を支えられるのは、介護家族の苦労をわかってくれていると思える専門職であると述べている。看護職は、息子介護者の苦悩体験を理解し、うまくいっている介護方法については息子に言葉で伝えることで息子介護者を支えていくことが必要である。

VII. 研究の限界と今後の課題

本研究は2事例を対象とした事例研究であり、それぞれの状況における個別の解釈である。また、結果を解釈する上で、本研究の対象者は息子介護者の中でも、体験を肯定的に捉えた介護が円滑にいった事例であったと考えられる。

息子介護者の背景や要介護高齢者の状況はさまざまであり、今後はそのような状況に応じた支援を見出せるような事例を積み重ねていきたい。

VIII. 結 論

要介護高齢者を介護するために離職した息子が、両親の介護に向き合い、どのような体験をしているのかを明らかにすることを目的として研究し、以下のことが明らかになった。

1. 介護のために離職し帰郷した息子（A氏）は、【今までとは違う親の姿を目の当たりにする】体験を重ね、【おふくろらしくない姿に泣きたくなる】や、【親父がなかなか自分の介護を受け入れてくれないことに逃げ出したくなる】体験をし、【人と話せない環境に気分がふさぐ】感覚を抱いていた。社会とのつながりが途切れるが、【趣味を介して新たな人とのつながりを得る】体験をし、両親との暮らしを重ねるにしたがって、【ありのままの両親を理解しようと思う】ようになり、介護を仕事と割り切って、【自分なりに感情をコントロールする方法をとる】体験をしていた。

2. 両親と同居し介護のために離職した息子（B氏）は、母親が転倒しやすいことや迷惑をかけたくないと考えていることなど、【日中の親を見たことで離職前には気づかなかったことが見える】体験をしていた。離職し両親と濃密に関わることで、【親に自分の言動を分かってもらえないことに気持ちの行き場がなくなる】こともあったが、【母親の介護をしていて嬉しいと感じる】ことや、【身近な人やモノに気持ちが救われる】体験をしていた。また、サービス利用や療養先の選択については両親の意思を尊重して、【親のことを一番に考えたい】と思い、母親の看取りを経て、父親だけの介護を続けることでだんだんと【父親が愛おしい存在になる】体験をしていた。

3. 息子介護者は、自ら望んで離職し両親の介護に専念する中で、今の両親を受けとめられなかったり、両親と思いがくい違う体験をしながら、両親との生活を重ね、介護の中での嬉しいと感じるなどの成功体験や親の入院や看取りを経験することでだんだんと両親に寄り添っていた。

謝 辞

快く面接に応じ、貴重な経験を語って下さったAさん、Bさん、そして研究にご協力くださいました訪問看護ステーションの看護師の皆様ならびに居宅介護支援事業所の介護支援専門員の皆様に深く感謝いたします。

各著者の貢献

YK：研究の構想およびデザイン、データ収集、データ分析・解釈を行い、論文を作成した。研究のあらゆる内容に対して、正確性や整合性に関する疑問が適切に調査され解決されることに責任をもつ、研究のすべての面に対して説明責任があることに同意した。

YT：研究の構想およびデザイン、データ分析・解釈に十分に貢献し、論文の重要な知的内容に関わる批判的校閲に関与し、発表原稿の最終承認を行った。研究のあらゆる内容に対して、正確性や整合性に関する疑問が適切に調査され解決されることに責任をもつ、研究のすべての面に対して説明責任があることに同意した。

MK：研究の構想およびデザイン、データ分析・解釈に十分に貢献し、論文の重要な知的内容に関わる批判的校閲に関与し、発表原稿の最終承認を行った。研究のあらゆる内容に対して、正確性や整合性に関する疑問が適切に調査され解決されることに責任をもつ、研究のすべての面に対して説明責任があることに同意した。

SH：研究の構想およびデザイン、データ分析・解釈に十分に貢献し、論文の重要な知的内容に関わる批判的校閲に関与し、発表原稿の最終承認を行った。研究のあらゆる内容に対して、正確性や整合性に関する疑問が適切に調査され解決されることに責任をもつ、研究のすべての面に対して説明責任があることに同意した。

{ 受付 '20.07.08 }
{ 採用 '20.12.24 }

文 献

- 天谷真奈美, 大塚真理子, 島田広美他: 痴呆性高齢者を介護する娘介護者の危機. 埼玉県立大学紀要, 4: 87-93, 2002
- 深山華織, 中村裕美子: 同居家族の就労により日中独居で過ごす要介護高齢者の不安とその対処. 老年看護学, 19(2): 75-84, 2015
- 平山 亮: 介護する息子たち 男性性の死角とケアのジェンダー分析, 155-182, 勁草書房, 東京, 2017
- 井口高志: 「人間性」の発見という希望と隘路—認知症とされる人を介護する家族の経験を問うことから—, 上野千鶴子, 大熊由紀子, 大沢真理他編, 家族のケア 家族へのケア, 93-112, 岩波書店, 東京, 2008
- 池添志乃, 野嶋佐由美: 生活の再構築に取り組む家族介護者

- の介護キャリア, 家族看護学研究, 15(2):107-116, 2009
- 厚生労働省:平成24年度仕事と介護の両立に関する実態把握のための調査研究事業報告書手助・介護を機に仕事を辞めた理由. 2012, https://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/h24_survey.html. (2018年12月26日)
- 厚生労働省:平成27年度 高齢者虐待の防止, 高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果 被虐待者からみた虐待者の続柄. 2015, <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000155598.html>. (2018年2月10日)
- 厚生労働省:平成28年 国民生活基礎調査の概況 要介護者等のいる世帯の状況. 2016a, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/index.html>. (2018年2月10日)
- 厚生労働省:平成28年 国民生活基礎調査の概況 主な介護者の状況. 2016b, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/index.html>. (2018年2月10日)
- 厚生労働省:平成29年 国民生活基礎調査の概況 世帯数と世帯人員の状況. 2017, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa17/index.html>. (2018年12月26日)
- 栗林佑希子, 山田和子, 森岡郁晴:在宅介護者の介護負担における性別毎の関連要因, 日本医学看護学教育学会誌, 25(2):28-39, 2016
- 黒澤直子:認知症高齢者の家族介護者への支援に関する現状と課題, 人間福祉研究, 14:121-128, 2011
- 松井由香:男性介護者の語りにみる「男性ゆえの困難」—セルフヘルプグループに集う夫・息子介護者の事例から—, 家族研究年報, 39:55-74, 2014
- 松本啓子, 桐野匡史:在宅認知症高齢者の男性家族介護者の介護支援に関する思い, インターナショナルNursing Care Research, 14(1):61-70, 2015
- 中里和弘, 涌井智子, 平山亮他:終末期ケアに関する親子間コミュニケーションの関連要因高齢の親を持つ子世代を対象に, 日本老年医学会雑誌, 55(3):378-385, 2018
- 越智若菜, 田高悦子, 臺有桂他:中年期就労介護者の介護と仕事の両立の課題に関する記述的研究, 日本地域看護学会誌, 13(2):140-145, 2011
- 総務省:平成29年就業構造基本調査結果 要約 男女, 就業状態別介護・看護のために過去1年間に前職を離職した者—平成19年, 24年, 29年. 2017a, <https://www.stat.go.jp/data/shugyou/2017/pdf/kyouyaku.pdf>. (2018年12月26日)
- 総務省:平成29年就業構造基本調査結果 要約 男女年齢階級別介護をしている者の有業率—平成24年, 29年. 2017b, <https://www.stat.go.jp/data/shugyou/2017/pdf/kyouyaku.pdf>. (2018年12月26日)
- 高見国生:介護家族を支える, 上野千鶴子, 大熊由紀子, 大沢真理他編, 家族のケア 家族へのケア, 113-134, 岩波書店, 東京, 2008
- 竹内孝仁:ケアをめぐる家族の葛藤, 上野千鶴子, 大熊由紀子, 大沢真理他編, 家族のケア 家族へのケア, 75-91, 岩波書店, 東京, 2008
- 内田佳見, 松岡広子:仕事をしている女性が主介護者として在宅介護を担う体験—両立の困難さと生活安定のための工夫—, 愛知県立大学看護学部紀要, 22:27-35, 2016
- 山本則子, 石垣和子, 国吉 緑他:高齢者の家族における介護の肯定的認識と生活の質(QOL), 生きがい感および介護継続意思との関連:続柄別の検討, 日本公衆衛生雑誌, 49(7):660-671, 2002
- 横瀬利枝子:介護施設利用に至るまで—認知症の母親への息子の対応—, 生命倫理, 20:76-84, 2010

The Struggles of Sons who Left Their Jobs to Care for Their Parents in Need of Nursing Care

Yoshimi Kajino¹⁾ Yuko Takeda²⁾ Maki Kato²⁾ Sachiko Hara²⁾

¹⁾ Matsue Red Cross Hospital

²⁾ Department of Community Health and Gerontological Nursing Shimane University Faculty of Medicine

Key words: Parents in need of nursing care, Son, Experience, Case studies

Objective: The purpose of this study is to clarify how sons have faced their struggles while taking care of their parents.

Methods: Two case studies: (Mr. A) resigned from his job to care for his parents and (Mr. B) cared for his parents while working yet resigned in time as well.

Results: Mr. A was shocked [facing the different appearance of his parents] [he felt like crying as his mother didn't look like herself]. Also [he wanted to flee because his father would not accept his care]. Although [he was depressed in an environment where he couldn't socialize], [he found new connections through hobbies] and [tried to understand who his parents had become] while living together. Through experience [he learned to control his emotions]. Mr. B found after nursing care his parents [he noticed things he missed before leaving his job]. Through close involvement with them he came to feel and experience things. [He felt happy nursing care his mother] and [his feelings were saved by the people and things close to him]. Although at first [he found adapting his feelings hard when his parents didn't understand his actions.] [he wanted to think about his parents first.] He then got to experience [love for his father].

Conclusions: It is necessary for nursing care professionals to support sons taking on the caregiver role by understanding their struggles and letting them know they are doing well with their parents nursing care.